

「ハスカップ新時代に向けて」

～ 勇払原野の風土と資源を持続的に共有するためのイニシアチブ～

2014/05/31(土) 14:00～16:30

苫小牧市サンガーデン研修実習室

司 会：北海道開発協会 環境コモンズ研究会 関口 麻奈美

みなさん、こんにちは。定刻となりましたので第4回環境コモンズフォーラム「ハスカップ新時代に向けて」を開催いたします。私は本日の司会を務めさせていただき、北海道開発協会 環境コモンズ研究会の関口と申します。よろしくお願いいたします。

本日のフォーラムは一般財団法人 北海道開発協会と NPO 法人苫東環境コモンズとの共催でご案内しています。私も苫東環境コモンズの活動に賛同して応援という形の支援会員として微力ですが協力させていただいています。

開会にあたり、環境コモンズ研究会座長の北海道大学公共政策大学院特任教授の小磯修二先生からご挨拶を頂きます。

開会あいさつ：環境コモンズ研究会座長・北海道大学公共政策大学院特任教授 小磯修二

本日は休日の午後の貴重な時間にフォーラムにご参加いただきありがとうございます。今日は第4回環境コモンズフォーラムということで、主催の環境コモンズ研究会とNPO法人苫東環境コモンズを代表して、ご挨拶させていただきます。

環境コモンズ研究会は、苫東環境コモンズの活動を研究の面からサポートしようと2008年度からスタートしています。NPOの活動はみなさんご承知のように、苫東の工業団地の緑地が持っている魅力や資源、価値をコモンズとしてみんなで高めていこうという活動です。それを研究会の立場で、その意味や今後の展開を議論してきました。

コモンズとは、元々は一つの土地をみんなで一緒に使うという“共有地”の考えです。これから人口が減少する中で、限られた資源を共有しながら一緒に使っていくという社会システムが大事な時代に、広い意味でコモンズの取り組みを考えることが、これからの地域社会の発展や活性化にとって必要という思いで研究活動を進めています。

苫東と同じような考え方や理念で取り組まれているコモンズの活動が、北海道だけでなく日本、あるいは海外でも取り組みの事例があることをまとめた『コモンズ 地域の再生と創造』を今年の初めに出版しました。この出版はこれからのコモンズを考える意味では、スタートです。苫東環境コモンズの活動もこれからは幅広い分野で進めていく必要があります。地域にある資源をみんなで連携しながら共同でその価値を高められるかに意味があって、今日は北海道にとっても大事な資源の苫東緑地に自生しているハスカップという資源に着目してコモンズの取り組みができないか、「ハスカップ新時代に向けて」のフォーラムを企画しました。足元にある資源の価値を見出す機会がないまま過ぎていの中で、今日はコモン・プール資源(Common pool resources)の一つ、ハスカップの活用を考えていこうと思います。



司 会：次に基調提言に移ります。北海道大学大学院農学研究院准教授 鈴木 卓様より、「今、世界が注目しているハスカップ」と題してご提言を頂きます。

鈴木先生のプロフィールにつきましては、お手元のプログラムに詳しくご紹介させていただいておりますが、北海道の野生の果樹などの栽培や利用についての研究を進めておられる立場から、苫東緑地の象徴でもあるハスカップについて貴重なご提言を頂けると幸いです。

基調提言1 「今、世界が注目しているハスカップ」

北海道大学大学院農学研究院准教授 鈴木 卓 氏

こんにちは、北大から参りました鈴木でございます。ハスカップとの関わりはもう30年ほどになり、苫小牧の地域でも色々な方にお世話になっています。お手元の資料の中に調査報告があります。この調査を行ったのが今から25年くらい前で、次にお話いただく草苺さんが苫東開発で柏原の自生地に案内していただいて調査を行った経緯があります。その頃は調査をしているとシマアオジが鳴いていたのですが、今ではその姿をすっかり消しているようで残念です。今日は、この間に世界であった生物多様性に関わるいろいろな動きをハスカップを含めてご紹介したいのと、勇払原野のハスカップの重要性について専門の園芸学の立場から紹介したいと思います。



身近な農作物は意外と新しい

今、世界が注目しているハスカップということで、お話させていただきます。私は食べられる園芸作物、果樹・野菜、時々山菜と自生している小果樹を研究材料にしています。

今が旬のアスパラはいつ頃から日本にあると思いますか…。

大正12年に北海道の岩内町で栽培したのが最初です。昭和30年代までホワイトアスパラしか作っておらず、缶詰用の輸出が伸び悩むようになり、昭和40年代から栄養価の高いグリーンアスパラが栽培され、最近は紫アスパラが出てきて、セットで初夏のトレンド的な贈答品となっています。

ブルーベリーはいつ頃からあるでしょう…。

野生の果実だったブルーベリーが栽培化されたのは100年くらい前のアメリカで、日本には50年くらい前に入ってきています。

カラーピーマン（パプリカ）も最近出てきた新しいものです。これは唐辛子と同じ植物です。韓国のキムチは昔から作っていると錯覚している方がいますが、コロンブスが新大陸を発見した以降なので、1600年頃からのもので、唐辛子は唐の時代からあるとあっていたら大間違いなのです。

夕張メロンは赤肉で、カボチャと掛け合わせたという方がいますが、ウソです。果肉の赤いメロンとネットがきれいに出るメロンを掛け合わせてできたのが夕張メロンです。青肉だったメロンが赤肉になったことで売れるようになったもので、これも40年くらい前からのものです。

トマトも最近はミニトマトや黄色のものがあつたりしますが、栽培され始めたのは昭和の初めで、新しいものです。

キウイフルーツの原産は中国ですが、ニュージーランドの研究者が持ち帰って選抜して世界に紹介したもので、1950年代にイギリス・アメリカを中心にブレイクしました。

このように、ある日突然出てきて当たり前のようにあるのが普通になる園芸作物は、意外と新しいものが多いことがポイントです。

韓国ドラマの「チャングム」で王様にリンゴを献上するシーンがありますが、使われているリンゴ

は「ふじ」です。ドラマは16世紀のことですが、リンゴの自生地は中央アジアで、18世紀ぐらいにイギリス、アメリカで大きなものに改良され、明治になって日本に入ってきています。ですからこの時代にこのような大きなリンゴはなかったのです。

リンゴの原生地では、背の高い木に小さな実が山のようになります。一方、青森では大きな果実となることから、同じ植物とは思えないくらいの違いがあって、品種改良と栽培化が非常に重要であることが分かります。今日はこの辺の話を中心にハスカップを見てみます。

植物の遺伝資源

COP10 というのは知っていますか...

COP (Conference of the Party) は、国際条約の中で環境問題などを話し合う加盟国の最高議決機関です。この中には種類があって、気候変動枠組条約 (COP-Framework Convention on Climate Change :FCCC)、生物多様性条約 (COP-Convention on Biological Diversity :CBD)、砂漠化対処条約 (COP-Convention to Combat Desertification :CCD) があって、今回注目するのは生物多様性条約です。

生物多様性 (Biodiversity) とは一体何でしょう? 多様性には“生態系の複雑さ”や“種の多さ”があり、意外と見落とされやすいのが“遺伝変異の幅広さ”です。一つの種の中でも遺伝的な変異がどれだけ内包されているのかが重要です。

生物多様性条約は1992年に採択され、翌年12月に発効されていますが、2012年10月現在、193の国と地域が条約を締結しています。しかし、超大国のアメリカは署名はしていますが批准していません。

生物多様性条約の目的は、次の三つです。

- 1 地球上の多様な生物をその生息環境とともに保全すること
- 2 生物資源を持続可能であるように利用すること
- 3 遺伝資源の利用から生ずる利益を公正かつ衡平に配分すること

発展途上国としては、先進国に対し自国の植物を持ち出し、多くの利益を得ているところから、その利益を還元して欲しいという要望が出されています。

アメリカには、国立植物栄養体 (クローン) 遺伝資源蒐集センター (National Clonal Germplasm Repositories) が各地にあって、それぞれ役割を担っています。この中で、Corvallis と Geneva を紹介します。

オレゴン州にあるCorvallisでは、ヘーゼルナッツ、イチゴ、ホップ、ナシ、カラント、グースベリー、ラズベリー、ブラックベリー、ブルーベリー、クランベリーなどの小果樹栽培種および野生種が遺伝資源としてコレクションされ、育種の素材とされています。圃場には世界各地で蒐集されたハスカップ遺伝資源が、2 haほしよぐらいの規模で栽培され、オレゴン州立大学教授 マキシソン・トンプソン (Maxine Thompson) さんによって、分類や利用について研究されています。



2002年にトロントで開かれた国際園芸学会¹での講演では、ハスカップ (*Lonicera caerulea* L.) の変種で主に勇払原野に自生するクロミノウグイスカグラ (var. *emphylocalyx*) がオレゴンでちょうどよい時期 (受粉を助ける訪花昆虫が活発となる時期) に開花することからよく実り、果実品質も良好であり、栽培化を図る上で非常に優秀な遺伝資源であることが紹介され、サスカチュワン大学のボブ・ボアーズ (Bob Bors) 教授によって、カナダでも栽培・育種に関する研究にクロミノウグイスカグラが用いられるようになりました。

同じ圃場ではコクワやマタタビも栽培されていて、地域適応性試験も実施されています。ハスカップやコクワのように、もともと北米にはない植物であっても、コレクションして栽培化に向けた研究が行われています。

種苗会社のショールームには、北海道のハスカップを原料とした製品が陳列され、注目されています。



次の Geneva はナイヤガラの滝に近い場所で、PGRU (Plant Genetic Resources Unit) がコーネル大学の施設として、リンゴ、酸果オウトウ²、耐寒性のブドウなどのコレクションをしています。そこで行われているいくつかの事業を紹介します。

栄養繁殖性遺伝資源の維持

リンゴの品種は接ぎ木で増やすので種ではなく、枝を維持しなければいけません。日本のものも含めて3,909品種・系統を広大な圃場に2本ずつ植えて維持しています。それは、一度その植物が地球上から消えてしまうと二度と復活させることができないからです。

リンゴの果実だけでもその変異 (遺伝子変化はとてたくさんありますが、花の色や萌芽期や葉が落ちる時期が違うものといろいろな変異があって、それぞれの品種について果実を切ってデジタルイメージとしての保存や、冬に採った枝の一部を液体窒素で凍結保存して、必要なときに芽接ぎすると回復することでバックアップもしています。

新しい遺伝資源の蒐集・獲得事業

果実の野生種は世界各地にあるので、何度も探索に行き各地の緯度・経度・高度・降水量などと採取した植物の情報を記録するとともに、種を採って -20℃ で保存し、枝は接ぎ木をして栄養体を育てています。

病害抵抗性のスクリーニング

遺伝資源として蒐集・獲得した野生種の中から、まだ日本には上陸していない、細菌が原因の火傷病 (fire blight) が出にくい種類を選んで、その病気に対する抵抗性の品種を育成しています。

遺伝資源の頒布

世界中の研究者からリクエストがあったときに、きちんと管理された中から有償で苗木や種を提供しています。

このようにアメリカ政府はこれまでに、遺伝資源の蒐集・保存に莫大な経費を投入してこれからも続けていくので、これは自国の利益だけではなく、人類の公益に資することを目的に実施されていて、発展途上国に利益を還元するのはおかしいというのがアメリカの主張です。

世界が注目する苫東のハスカップ

勇払原野のハスカップは、開発に伴って野生の自生株が厳しい状況にあるということですが、幸いにも旧苫東会社によって「つた森山林」に1.5万株が移植されています。これは非常に重要な遺伝資源です。

栽培化することは、甘いものを残してそれ以外は淘汰するので、単一化に繋がります。

勇払原野に自生する株と20年前に同じ自生地から北海道大学の圃場に移植した株の果実を比べたところ栄養素に違いが見られました。これは、栽培化が原因でハスカップの形質に影響を及ぼしているものと考えられます。おいしいハスカップとなるように栽培化は大切ですが、野生を含む多様な遺伝資源を残すことが、これからハスカップが関連した産業を発展させる上でも非常に重要です。世界中でもハスカップの1変種であるクロミノウグイスカグラの自生株集団は勇払原野にしかありません。このことは苫小牧市民、北海道民、日本国民、全世界の人類の貴重な財産だということを皆さんに再認識していただきたいと思います。

補足になりますが、野生種でアイヌの呼び方からきているハスカップは世界の果実の名前になっています。それを提唱したのは、マキシム・トンプソンさんで、ローマ字書きした“haskap”が共通の英語で果樹の名前として使われています。

1 国際園芸学会(International Horticultural Congress)
世界の園芸学研究者が集う国際学会で、4年に一度開催されている。2002年の第26回大会は、カナダのトロントで開催された。

2 酸果オウトウ(Sour CherryまたはTart Cherry)
スミミザクラ(酸実実桜、学名:Prunus cerasus)は、ヨーロッパや南西アジアに自生するバラ科サクラ属サクラ亜属に属する植物で、スミミザクラはセイヨウミザクラに近いと考えられるが、スミミザクラの果実のほうが酸味が強く、料理に用いられる。

司会：鈴木先生、ありがとうございました。ハスカップの野生種が重要で、優秀な遺伝子であることに驚き、将来のハスカップビジネスの可能性を感じました。

次に、NPO 法人苫東環境コモンズの草苺健事務局長より「ハスカップと苫東」をテーマに基調提言を頂きます。草苺さんは長い間、苫東の緑地を実践的に保全・利活用されてきた経験からお話いただけたと思います。

基調提言2 「ハスカップの保全と苦東」

NPO 法人苦東環境コモンズ 事務局長 草苅 健

鈴木先生からハスカップが世界的に使える言葉に格上げされたということを知り、それだけでも胸が膨らむような気がして嬉しくなりました。

私は、「ハスカップと苦東」の話をさせていただきます。お渡しした資料にNPOに関連する資料のニュースレターが入っています。左上に書かれたこの“haskap”という文字が世界的に通用するというものでした。



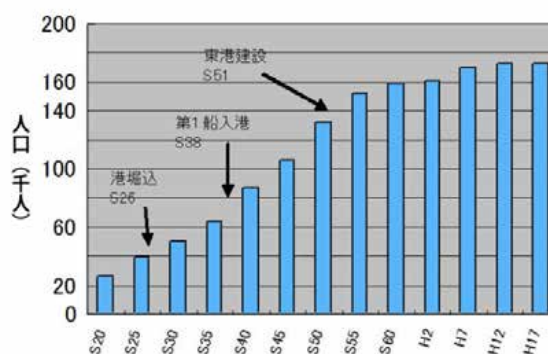
NPO 苦東環境コモンズは、非常にマイナーでご存知の方がほとんどいないと思いますので、少しだけ紹介させていただきますと、

本来、環境の保全は土地の所有者が行うことが通説となっている中、私たちは苦東の未利用地でかつ魅力的な原野の部分の保全活動をしながらかつ地域住民がみんなで活用できるコモンズ的な場所にして、(株)苦東さんとの協定によって保全管理と同時に近隣住民の利活用を進めているところです。

苦小牧の発展と苦東

苦小牧市では、昭和20(1945)年に27,000人ぐらいだった人口が平成12年には173,000人となっています。昭和20年から15年程で倍を超え、さらに15年で倍になっています。その間には現在フェリーが発着している西港の着工が昭和26年に始まり、38年に第1船が入港、48年には苦東のプロジェクトが始まり、51年に東港建設が着工されています。つまり、苦小牧の人口増の背景には、港の建設とこの地の利を拡大するプロジェクトが国・道・地元自治体及び民間によって進められてきたことがあります。

苦小牧の人口の推移



このような開拓と開発そして住宅建設も進み、自生する原野は少しずつ姿を消してきました。一方、苦東のプロジェクトが始まった40年代には、本州各地でいろいろな環境問題が発生したという反省を踏まえ環境を保全する姿勢が生まれ、苦東プロジェクトでも実践されてきました。

このように、自生する面積が減っていく中で、残った原生地を見るとハスカップが土地の乾燥によって枯れ始めているようだとの疑問から、NPOでは昨年より調査を続けています。調査で注目すべきは、ハスカップと同じ仲間であるヒョウタンボク属のベニバナヒョウタンボクが先に枯れ始めていることです。昨年の調査では、ヘクタールあたり1,800~2,000本のハスカップが確認されましたが、40年前の調査では2,500本/haぐらいあったと記憶しています。

昭和50年代の苦東とハスカップの流れを振り返ってみると、旧苦東会社はプロジェクトが始まった昭和48年から将来を見越した移植活動を行っていましたし、いすゞ自動車の用地造成のアセスメントの措置として、移植とともに地域への無償分譲が行われました。これには、この頃、ハスカップがブームとなっていたこともあります。また、子会社ではハスカップジャムやワイン製造を行って、地域ブランドもつくり始めています。

いすゞ自動車の造成では、樹木実態調査を行っています。高さ30cm以上のハスカップだけで15万本があって、昭和54・55年に市民に2万本、各地の農協などに1万数千本のほか、学校や企業にも分譲しています。ハスカップを里子に出したわけですが、庭木として見栄えのする植物ではないので、

市民のところに行ったすべてが残っているかは分かりません。ハスカップが農家に引き取られたのは、折からの減反政策と相まったもので、千歳、美唄、上富良野、士別、など遠方を含む道内各地に渡っています。印象深いものに、幌延町の男能富^{だんのつぶ}小学校へ北海道新聞の記者と一緒に届けたこともありました。

私とハスカップに関するエピソードとしては、次のようなことが思い出されます。

- ・いすゞ自動車の苫小牧工場では、ジェミニのエンジンを製造することになって、双子座を意味するジェミニとハスカップが双子のようにして実がなることからストーリー展開ができないか、いすゞ自動車や苫東の方にも話をしてみました。全く無視されました（笑）。この頃からハスカップには何らかのストーリーが必要であることを思い始めていました。
- ・苫東のハスカップは、霧のために日照が不足し糖分含有量が少な過ぎて、ワイン醸造の工程で砂糖などを加えないと発酵しないことが分かりました。これは醸造元の北海道ワインの担当者に聞いたことです。
- ・昭和天皇が栗山の林木育種研究所にお見えになられたときに、夕張メロンとハスカップを出したところ、2回ともハスカップを所望されたと当時の千葉 茂所長に伺いました。
- ・私は立場上、ハスカップの分譲や栽培に直接かわりを持ちましたが、担当上司からの命もあって、製品のラベル製作のためハスカップの図案化も致しました。おびたしい写真を撮りその中から最もハスカップらしい構図を選び出しました。
- ・地域の反応としては、ハスカップを保存する動きが、郷土文化研究会などからでたり、ハスカップ豆本やハスカップを使ったお菓子が次々と出ていました。

ハスカップ・イニシアチブ

ハスカップが地域ブランドとなるために、いろいろな方々が携わっていますが、まだハスカップの決定打やストーリーがありません。

ハスカップが自生する勇払原野とおいしいハスカップができる栽培適地とは違っているものです。苫東のハスカップ原野がサンクチュアリと呼ぶ由縁は、湿原のミズゴケの上に実生の赤ちゃんハスカップが誕生していることと、成熟したハスカップの群生の両方が見られるからです。ハスカップをもっと身近なものにするために、ハスカップの湿原をふかんしたりもっと可視化する工夫や仕組みが必要ではないかと思えます。

ハスカップ新時代の提言では、ハスカップが勇払原野のコモン・プール資源で、みんなで共有するという考え方が生まれつつある今だからこそ、関係者が集うようにハスカップを中心にアイデンティティを高めることとしてはどうかと考えています。例えばハスカップを「北海道遺産」に仕立てる動きを始めたり、住民とハスカップのつながりの記録を正式に残すため、市民からエッセーを集めて「ハスカップとわたし」（仮称）冊子化したり、ハスカップの風土を保全する担い手が必要なのでNPOなどの組織づくりを進めることが必要だと思えます。ちなみに、北海道遺産は協議会があって、これまで52ある遺産を増やさない方向で来たことを6月の総会で議論するそうですので、注視する必要があります。

これまで、開発か自然保護かでとかくネガティブに捉えられてきた風土の感覚を、「苫小牧は良いところで、これからの産業の場であり、文化の場でもある」ことを積極性を持って捉え直し、発信できる場にしていく。そんなハスカップ新時代に向けた取り組みである「ハスカップ・イニシアチブ」を提言したいと思います。

司 会：ありがとうございました。私も美唄でハスカップを摘んだことがあります。土別や幌延にも里子として出ていることに驚き、勇払原野がハスカップのふるさとして情報発信されていくとよいと感じました。

* * * 休憩 * * *

司 会：それでは、ただいまから「ハスカップ新時代に向けて」勇払原野の風土と資源を持続的に共有するためのイニシアチブと題してディスカッションを行います。
本日のパネラーですが、ハスカップをテーマに川上から川下までの一連の流れに関わるみなさまが一堂に会して議論できるようにお集まりいただきました。本日出席予定だった苫小牧工専の岩波先生ですが、急きょ所用ができて欠席となっております。
ここからの進行役は、鈴木先生にお願いします。

ディスカッション ハスカップ新時代に向けて

鈴木：司会を務める鈴木です。ハスカップには野生のものや栽培して利用するもの他、食べたり、接して幸せになるなどいろいろな利用の方法があります。パネリストのみなさんには、まずそれぞれの立場からハスカップについて思いやコメントをいただきたいと思います。



ハスカップはまさに市民の宝

女性みなと街づくり苦小牧代表 大西育子 氏

ハスカップのまち苦小牧と言われて久しく、当時一生懸命に活動していた人たちには既にリタイアした方々もいるかと思います。苦小牧駅前通り商店街青年部では、40年ほど前より毎年6月末から7月中旬にかけてハスカップウィークを開催していたことを苦小牧在住の方でしたら覚えている方もいらっしゃるかと思います。市内の幼稚園児、商工者が娯楽場パークに集まる大イベントで、私も事業者としてお手伝いさせていただきました。



昭和62(1987)年末に「ハスカップを広める会」を立ち上げ、厚真産の実が市内に流通し始めた頃でしたが、子どもたちがハスカップの木が分からないので、ハスカップを市の内外に広める活動を始めています。メンバーには郵便局や農協の職員、喫茶店の組合長に会長となっただき、沼ノ端が今のような住宅地ではなかったので、スコップとフラワーポットを持って、地主さんに許可を得てハスカップを採らせていただき、市内の公共機関や銀行の窓口をお願いして配布させてもらう活動で会がスタートしました。

その後、ハスカップの料理を募集したり保育園の子どもたちに描いてもらった絵を郵便局のロビーで展示したりの活動もしました。

5年経ち、活動の記録として小冊子『ハスカップ』を作成して会の活動の区切りとしています。改めて見てみると、ハスカップの木の剪定や育て方が書かれており、農協さんにもお世話になったことを思い出しました。



私自身、みなと街づくり苦小牧の他、いろいろなことをやっています。ハスカップが好きで事業化するために、平成4年(1992)にハスカップサービスを法人化して、経営の勉強を兼ねて中小企業家同友会に入会しました。平成12年には、鈴木先生や皆さんのご縁があり、現在の「苦小牧地域資源ハスカップ等利活用研究会」の前身の「北方圏農水産物研究協議会」を立ち上げています。

今日、欠席となった苦小牧高専の岩波先生とも共同研究をしていて、思い入れだけでなく、学術的、計数的、科学的にもしっかりと試作を重ねて、商品化したものもあります。先ほど鈴木先生もおっしゃっていましたが、研究開発をしていく中で在来種の優位性が多くみられ、在来種を守りながら栽培につなげることの大切さを感じました。唯一ある苦東のハスカップは希少で、保全是大切なことだと思います。

ハスカップと自身のかかわりとして、これまでの活動を支えていたものは何だったのか考えてみる

と、青森県出身の祖母がハスカップが大好きで、戦後何もなかった時に自生していたハスカップを近所の人たちと摘みに行き、孫である私に食べさせてくれたことが記憶にあります。苦小牧の夏の風物詩として、樽前山神社のお祭りがありますが、その宵宮で、ハスカップに白い砂糖をたっぷりかけて食べることが何よりの楽しみでございました。ほろ苦く甘酸っぱく素朴な野原のにおいがして、赤ひげさんのようにになりながら口いっぱいにはおぼった思い出が蘇ります。

5~6月に花が咲き、7月の1か月足らずでの実の収穫、たくさんの可能性を持つハスカップが苦小牧に生まれ、苦小牧に生き、苦小牧に還っていく私としては我が身ということになるのでしょうか。

鈴木：続いて、栽培の視点から山口さんをお願いします。

オリジナル品種のブランド化に向けて

ハスカップファーム山口農園 山口善紀 氏

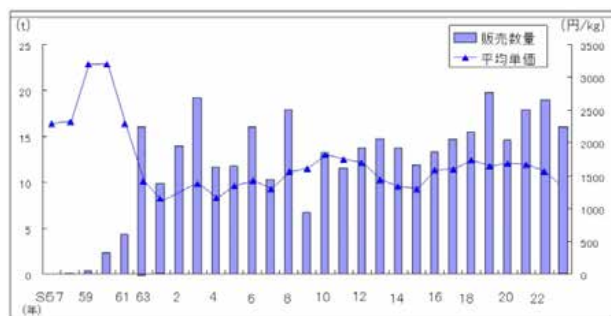
(JAとまこまい広域 厚真町ハスカップ部会 副部会長)

今日は栽培者の立場から、ハスカップについてお話ししたいと思います。

厚真町でハスカップの栽培が始まったのは昭和57年頃からです。苦東の開発をきっかけに里子に出された一部が厚真町に来て栽培が始まっています。当時は希少価値が高く、3,000円/kgぐらいで取引され、部会にも100名ぐらいのメンバーがいましたが、生産面積が広がるとともに急速に単価が下がって、生産意欲をなくした方もいて生産者もどんどん減っていきました。平成10(1998)年ぐらいにハスカップのブームがありましたが、飽きられてしまい価格が下がるという繰り返しをしているのが、ハスカップ栽培の現状です。



厚真町でのハスカップ栽培は、勇払原野にあった株を畑に移植することから始まります。野生なので変異も多く、栽培に向けたものやそうでないものと同じものがなく、栽培畑では100本の株があると100種類のハスカップを育てていることになっていました。農協に出荷する時には味には関係なく、少しでも見た目を良くしようと、同じような粒をそろえてパック詰めをしていたのが最初の販売方法でした。ですから、甘いもの、酸っぱいもの、苦いものが混ざっていて、当り外れのある作物として苦小牧では認識されていたと思います。



厚真町でのハスカップ栽培は、勇払原野にあった株を畑に移植することから始まります。野生なので変異も多く、栽培に向けたものやそうでないものと同じものがなく、栽培畑では100本の株があると100種類のハスカップを育てていることになっていました。農協に出荷する時には味には関係なく、少しでも見た目を良くしようと、同じような粒をそろえてパック詰めをしていたのが最初の販売方法でした。ですから、甘いもの、酸っぱいもの、苦いものが混ざっていて、当り外れのある作物として苦小牧では認識されていたと思います。

栽培では、消費者の方に親んでもらおうと、苦いものを除いたり粒を揃えるのに同じ木を挿し木で増やしていきました。山口農園のハスカップの優良系統の選抜は、母が昭和53年から取り組んでいます。当初から味の良くないハスカップを栽培しては需要を伸ばすどころか、客離れにつながると思った母は、おいしくしたいという思いに駆られたようです。しかし、本人はハスカップが嫌いでしたので、私と弟がハスカップの実がなると苦い実を探して木に印をつけるアルバイトを小学生から中学生にかけてしていました。その甲斐あって、味の悪いものを畑から排除できました。その他に形の悪いものや熟し方に問題のあるもの、粒の小さいものや柔らかすぎるものを排除して、残ったものから味の良い大粒のものを挿し木で増やして圃場を作っていました。

ハスカップが売れなかった平成14年頃に厚真町でハスカップの優良系統の調査が始まり、改良に努力していた4件の圃場から選抜して、21年に「ゆうしげ」と「あつまみらい」という2品種が日本で2、3番目の品種として登録されています。それぞれの特徴は「ゆうしげ」が大粒で酸味が少なく糖度が12以上あって甘いものです。「あつまみらい」も大粒で実が固く、甘い品種ですがハスカップらしい爽やかな酸味が残りますので、ハスカップ好きに選ばれます。

2品種を登録したのには、果物の味覚では酸味が好きな人と嫌いな人がいるのでどちらにでも好まれるためと、ハスカップは他果授粉といって、自分の花粉では実にならないので1品種を登録して畑をつくと実が生らないので、並べて植えることによって確実に実を生らせるようにしています。こちらの品種は、厚真町から出さないことを決め、オリジナル品種としてブランド化に向け、JAや厚真町から苗木助成を生産者にさせていただき、年間約1,000本を植え付け、6年間で5,000本以上の栽培が行われています。まだ、木が小さいので昨年は600kgほどですが、将来的には1万本で10tを目指した計画で進めています。

ハスカップ部会ではブランド化に向けて、秋・春に剪定や栽培の講習会や圃場研修、出荷説明会を行っています。3年前前から厚真町はハスカップの栽培面積が日本一となって、現在22haで栽培されています。

今年のハスカップは、暖かかったので、5/10ぐらいから咲き始め8分目程の花が咲き終えて青い実が少し膨らんできています。厚真町では6/25ぐらいから収穫が始まるのではないかと思います。

今後の産地の取り組みとしては、高品質な生食用果実の安定生産をすること、在来品種の果実加工による高付加価値化を目指すこと、生産者のさらなる技術の向上と平準化を図るとともに、消費・流通形態の変化に応じた販売推進として、ハスカップは非常に潰れやすい果実なので流通を改善して、苫小牧だけでなく道外に向けても良い状態で販売していきたいと思っています。

最後に、ハスカップ栽培面積日本一の町・厚真町では3年前から厚真町ハスカップフェアを開催しています。今年は、7/5～21日でハスカップ狩りを受け入れている農園10軒を案内してもらえますし、町内の飲食店ではハスカップを使った商品を提供したり、「こぶしの湯 あつま」でPRイベントを行っていますので是非、厚真町にお越しください。

山口農園では、今年の3/21に「ハスカップカフェ 山口農園」として、ハスカップに特化した商品を移動販売しています。ハスカップを大量に消費していただいている苫小牧の方々是比较的高齢層なので、若い方に受け入れられるように、クレープ・スムージー・ソーダを販売しています。通常は厚真町内で営業していますが、イベントや道の駅で見かけた際には寄っていただきたいと思います。

鈴木：続いて、自然保護の観点から日本野鳥の会 原田さんから発表をお願いします。



苫東の希少鳥類とハスカップ・サンクチュアリ

日本野鳥の会 チーフレンジャー 原田 修 氏

私からは、勇払原野でハスカップが自生する場所の周辺を含めた鳥類の面からの環境保全のお話をさせていただきます。



かつての勇払原野は湿地面積が8,000haあってサロベツ原野・釧路湿原と並んで北海道の三大原野と呼ばれていました。昭和30(1955)年には少し減って5,000haとなりましたが、一定の湿原はありました。その後、経済成長に伴って港の掘り込みや農地の造成、河川改修や工業地化もあって平成10(1998)年には8分の1の1,000haになっている状況です。その中でウトナイ湖が渡り鳥の渡来地として有名でしたので、地元の方・野鳥の会・苫小牧市の3者の連携によって、日本初のサンクチュアリが1981年に開設されて活動が始まり、10年後にはウトナイ湖が日本で4番目にラムサール条約に登録されています。また、ウトナイ湖周辺の自然環境が大きく変わる開発計画だった千歳川放水路計画が中止となって、ある程度ウトナイ湖の保全の目途がついたところです。

現在、苫東の工業地帯にはかなり良い状態で自然が残っているので、ウトナイ湖と一体として勇払原野の苫東地域を中心に保全活動を行っています。

苫東の地域は、1970年代に10,000haの3割を緑地として残すという、当時としても画期的な計画でしたが、その後のオイルショックなどの影響もあって、分譲予定地の2割ほどが分譲されただけで、そのほとんどが未利用地のままになっているのが現状です。その中で、北西部の空港に近いエリアの臨空地帯と南東部の港に近い部分の臨海地帯の造成が進んでいる2カ所を中心に開発をして、それ以外の当面の分譲から外したプロジェクトゾーンには、比較的良好な自然環境が残されています。そのエリアを中心に苫東地域で調査したところ、22種類の希少鳥類が確認され、苫東のエリアが生物多様性の分野から重要な場所であることが分かってきました。

一方、苫東の新計画では、湿原や森林と共生するアメニティ空間という形で、比較的自然環境が残っている場所を工業以外の利用を含めて検討される状況になってきています。我々も、ウトナイ湖と一体化している湿地のアメニティ空間の調査を行って、平成17年に作成した勇払原野の保全構想の報告書を基に、弁天沼を中心とした場所を鳥獣保護区に指定する要望書をこれまでに二度提出しています。

弁天沼の周辺にはまだ湿地が多く残っていて、ウトナイ湖を除いた勇払原野ではまとまった面積の自然環境が残されているので、勇払原野保全の中心と考えています。

千歳川放水路計画で使われる予定だった安平川の河川整備計画では、下流部に沈砂池の機能も含めた遊水地として位置付ける洪水防止対策が話し合われていますが、予定地周辺の希少鳥類の分布を確認したところ、チュウヒ・アカモズ・シマアオジなどの生息地でした。近年になって、以前確認されていた営巣地で見られなくなったところもありますが、まだまだ多くの鳥が生息しています。

整備計画の調整の中で、計画されていた1,500haの遊水地が950haに縮小され、道道上厚真苫小牧線が整備されてその周辺の利便性が高くなり工場用地・遊水地のどちらにするのか協議が進められ、遊水地との境界も今年度中には形になるのではないかと考えられます。

我々としては、工業用地はほかにも未利用地がありますが、希少鳥類の営巣地はここにしかないので、何とか遊水地として残してもらえないかと考えています。

遊水地とすることで、工業用地の中で自然環境の保全をすることが特徴的で、上手く利用することで新しい地域の発展の形が造れるのではないかと考えています。

平成22年に策定された『北海道の生物多様性保全計画』では、「北海道の特徴的な自然景観である湿原」や「希少生物の生息環境」を保全の対象としているので、この地域が具現化となる場所で、他にはないかけがえのないところだと考えています。野鳥の会だけでなく、植物や他の面からの北海道自然保護協会、日本生態学会北海道支部からも保全の要望が出されています。

22種というのは、秋、冬も含めて観測された種類ですが、生き物にとっては繁殖の環境がきちんとあることが大切なので、2年程前から、繁殖期にこの場所の希少鳥類の調査を行っています。その中で昨年は7種類が確認され、特に弁天沼でタンチョウが確認され、今後繁殖する可能性が高いと考えられています。

そのエリアの北部に草苺さんがおっしゃっていた「ハスカップ・サンクチュアリ」があって、昨年勇払原野自然体感ツアーを組んだところ、大型バスを使うほどの参加がありました。観察会なので、ハスカップの摘み取りはほんの少しだけ、とお願いましたがみなさん私の話を聞かずに摘み取りに熱中する状況となってしまいました。しかし、今後もハスカップや勇払原野の自然の魅力やその重要性を伝えていければと思います。



鈴 木：続いて草苺さんお願いします。

ハスカップ・サンクチュアリの現状

NPO 法人苫東環境コモンズ 事務局長 草苺健

先ほどの「ハスカップ・サンクチュアリ」の続きになりますが、私が現場に行った40年前には、湿原にハンノキが始め、その時には真っ白になった枯れたヒョウタンボクには全く気付きませんでした。40年後の今、枯れ始めています。恐らく、植生の遷移としては、このままハンノキが成長してサクラやミズナラ、コナラも見えているので、乾燥化が進みハスカップは徒長していずれ倒れてしまい、ホザキシモツケが何かの群落に変わっていく可能性があります。

勇払原野の植生図では、私共がハスカップ・サンクチュアリと呼んでいるところはハンノキ林となっています。実際には高密度にハスカップが生えていますので、ハンノキ・ハスカップ林というのが正しいのではないかと思います。遊水地協議会で使われている植生図でも、ハスカップ群落は豆粒ほどの範囲しか示されていませんが、それでは少しずつ枯れ始めている原生地の大群落の現状をどうしたらよいかということです。

私共は、土地の所有者にお断りして、ハスカップの徒長を防ぐことができないか、被圧しているハンノキを部分的に切ったり、ハスカップを地際から切ることで新しい枝が出てきて萌芽更新することがサンクチュアリできないか、小さな面積で試験的にやっています。

これからハスカップを苫小牧市、あるいは地域のシンボルとして見ていく時に、原田さんとは別の立場で、残された部分（プロジェクトゾーン）をどうしていったらよいか考えてみたいと思います。

ハスカップを保全する動きとして、いすゞ自動車の環境アセスメントではハスカップが当時の環境庁が指定する貴重植物となっていて、開発行為をする上では保全する措置をしなければならず、苫東ではその保全措置として移植したり一部に残すことをしました。

当時、使われていなかった言葉に“ミティゲーション”³というのがあって、アメリカ他先進各国

では環境への影響を回避・緩和する方法にミティゲーションが行われています。苫東のハスカップの移植は結果的に、生物への影響を緩和するミティゲーションを行ったこととなります。

以前には苫東でも、公害問題や環境破壊と言われていましたが、いすゞ自動車の造成以降に環境破壊という言葉が出てこなかったのは、ミティゲーションをその都度真剣に行って対処してきたからなのだろうと思います。

3 ミティゲーション (mitigation)
開発による自然環境への影響を何らかの具体的な措置によって緩和することを意味しており、人間活動によるマイナスの環境影響を緩和するために、事業者に課せられるあらゆる保全行為のこと。
ミティゲーションの5つの概念と処置

- ・回避 特定の行為あるいはその一部を行わないことにより、影響全体を回避する。
- ・最小化 行為とその実施において、程度と規模を制限することにより、影響を最小化する。
- ・矯正 影響を受けた環境を修復・回復または改善することにより、影響を矯正する。
- ・軽減 保護・保全活動を行うことにより、事業期間中の影響を軽減・除去する。
- ・代償 代替の資源や環境で置換、あるいはこれらを提供することにより、影響を代償する。

鈴木：ありがとうございました。これから会場の皆さんを交えて議論を深めていきたいと思います。最初にパネリストのみなさんのお話を伺って、ご質問などありませんか…。



では、私から原田さんに質問ですが、ハスカップの果実をエサとしている野鳥はいるのでしょうか？

原田：ハスカップを食べているところを見たことがないので、何とも言えませんが、ヒヨドリなど果実を好む鳥は食べているのだと思います。

鈴木：野生のハスカップの広がり野鳥が果たす役割はあるのでしょうか？

原田：鳥が食べて種を散布させている可能性はありますが、ハスカップが落ちた先で根付くかは、他の植物との競争では弱いのではないかとと思うので、難しいと思います。

会場A：私も小さい時からハスカップを食べていましたが、親から体に良いものと言われ、おいしいのと健康によいものと自覚して食べていました。在来種の優位性があるとのことでしたが、どのようなことがあるのでしょうか？

鈴木：栽培化とは優れた品種・系統を作って、なるべくそれだけをつくることとなります。野生のものは非常に雑ばくで全て成分が違うハスカップです。その中で体に良い成分だと、抗酸化成分のアントシアニンやポリフェノールを含んだものもありますが、そうでないものもあります。そのように多様なものが野生種なので、全てがよいとは一概には言えません。

単一の成分だけに着目して多く含んだものを選び出して栽培することはできます。しかし、栽培したハスカップに病気が出たとき、多様性を持った野生資源のハスカップがないと改良することができませんし、その病気に強い野生種あれば、耐性を持つハスカップとすることができるのです。そのバックアップのための遺伝子のプールとなっているのがここ勇払原野で、そこに自生するハスカップなのです。

ハスカップが世界のくだものになって、問題が起きた時や別の機能性の高いものの素材があるのが勇払原野なのです。ですから、野生種を保護することは非常に重要なこととなります。

鈴木：いろいろな立場のパネラーのお話を総合すると、「ハスカップを栽培化して積極的に利用する立場」、「苦小牧を中心としたエリアでまちづくりに利用する立場」、「環境を含めてハスカップを保護する立場」の3つに分れると思います。最初のハスカップを栽培して積極的に利用するのに皆さんから何かご意見ありませんか...

会場B：ハスカップの果実を使ったワインは見たことがあるのですが、リキュールはどのようなのでしょうか？

山口：厚真産ではありませんが、美唄産で漬け込むタイプのリキュールが販売されています。

鈴木：ベルギーやオランダではビールに果汁を入れて作っているの、それをハスカップでやりたいとのことで、外国から電話があったことがあります。その頃は千歳市農協さんが頑張っていたので紹介したことがあります。

会場B：果実系のものではいろいろなお酒にしたものが出回っていますが、ハスカップのものは流通していないように思えます。どこに問題があるのでしょうか？

山口：加工業者の方と良くお話しますが、加工用に流通するハスカップは、2,000円/kg前後ですが、リキュール系の原料として欲しい値段は1,000円/kg以下の値段なので、価格帯が合わないことがあります。また、酸度が非常に高い果実なので発酵がしにくいこともあります。

鈴木：山口さんがやられているのは、成熟用で高品質で高付加価値あるハスカップですが、加工用のハスカップ生産を考えても良いと思います。手間をかけずに機械で収穫できるような品種を育成して加工原料として安く供給することも必要だと思います。

会場B：ハスカップをアルコール類にすることはダメなのではなくて、この先もっと伸ばせる可能性があるということですね。ありがとうございました。

会場C：苦東に残された自然が、地球環境全体からも重要なテーマで、そのことを広く認識してもらうための一つの手段として、ハスカップ・サンクチュアリをやられているように思いました。

突飛な話ですが、庭にハスカップとブルーベリーを植えたことがあります。同じような時期に実がなって似たようなものですが、ブルーベリーは糖度が高く、ハスカップは酸度の高いものです。環境コモンズの呼び水の手段として、ブルーベリーを繁殖させることはどうでしょうか？

草薙：それは全く考えたことがなかったことです。本州ではブルーベリーの採取園が成り立っているようですので、山口さんのサイドビジネスとして、ハスカップの横でブルーベリーがあっても良いかと思います。

山口：個人的にも簡単に栽培できるのであれば、ブルーベリーの方がお金になるのでそちらをやりたいのですが、ブルーベリーは凍害に遭いやすく、雪で覆われる地方では良いのですが、雪の少ないこの地方での栽培は難しいので、ハスカップ一筋でやっています。

鈴木：ハスカップを核にした苦小牧発信のまちづくりで話をしたいと思います。草薙さんから北海道遺産の話がありましたがいかがでしょう。

大西：冒頭にもお話しましたが、苦小牧市民に多くのハスカップの株を配布しましたので、家庭の庭にハスカップがあつたりしますが、戦後急速に人口が増えて、商業形態や経済・産業が変わってしまった中で、苦小牧市にハスカップが息づくことが難しく、むしろ苦小牧市内からハスカップが消えてしまっています。ですから、これからは苦東の工業地帯の中でハスカッ

ブを市民と共有していくことが大事なのではないかと思います。先日、寺島実郎さんから苦東のインダストリアルパーク（産業公園）への提言が新聞にも出ていましたので、これまでの何十年か前からやってきたハスカップのまちづくりとは別に、違った形で苦小牧市民が苦東をもっと身近に考えてもらえることが大事なのではないでしょうか。

鈴木：苦東を身近に思える工夫について、会場にいらっしゃる苦東さんからご発言をお願いします。

苦東（成田社長）：あちこちで企業誘致のプレゼンテーションを行う際に、苦東が一番大切にしているのは自然との共生で、その象徴がハスカップであることをお伝えしています。苦東にあるハスカップが貴重なものであることは認識しておりますし、多くの苦小牧市民の方に親しんでもらいたいとも思っています。

今週は、札幌の中学生が大型バス5、6台で苦東に来ていただいて、林から枯れた木を運び出したり、丸太を切ったりという森林体験を楽しんでもらっています。

その場所は平成19年に全国植樹祭が行われたつた森山林横の広場です。一度に200人ぐらいの子どもたちに自然の体験をさせても先生の目が届くという、国内でもそう多くない場所であることが旅行代理店の口コミで広がっているそうなので、我々としても多くの方に来ていただいて利用・体験してもらい、その中でハスカップについても良く知ってもらえるようにしていきたいと思います。

鎌（望月専務）：苦東では1.5万本のハスカップを保存していて、多くの方々に開放できればよいのですが、非常に貴重なものなのできちんと保存しなくてはならないとの強い認識があります。このため、以前のように苦東から里子に出す、幼稚園や小学校に移植するなどの方法で、市民の方々のためになるようにと考えています。

鈴木：1か所だけで保存することが危険なのは、例えば山火事などですべての遺伝資源が燃えてしまう可能性があり得ます。できれば貴重な資源は分散して保存するのが望ましいですが、個人や企業だけでも無理なので、ある程度は行政や国が関わってやっていかなければならない問題です。それくらい、野生のハスカップの遺伝資源は重要であることに声を上げていくことが重要です。

大西：この街を担っていくのは地元の子もたちなので、市内の子もたちに開発や経済ではなくて、教育の部分から苦東で汗を流す体験を含めてハスカップにつなげていくことが重要です。

ハスカップが苦小牧にとって素晴らしい資源であることを苦小牧市民が知らないのが、今日を機会に苦東での自生のハスカップの保存につなげられれば、まちづくりからも入っていくのかと思います。

鈴木：コモンズの利用・植生の保全について、今後の取り組みでご意見をお持ちの方…。

会場D：種の保存と身近でハスカップが見られるように移植するということでしたが、勇払原野に多く自生したハスカップは、どういう土地に変えていくとよりよく育つものなのでしょうか？

山口：山に植えたり田に植えたり、栽培なので肥料を与えたり、防除もしておりますが、数年前から“自然栽培”として何もしない栽培方法も取り入れています。ハスカップは非常に強い植物でどんな環境でも生きていけるのではないかと感じています。先ほど紹介した品種登録した「ゆうしげ」は野生種ですし、「あつまみらい」は野生種を自然交配したものですので、遺伝子的には自然に近い状態ですので、種を取ったとしても違うものが出るかも知れません。

鈴木：元々の自生地は泥炭地でした。ハスカップにとってその生育環境が良かったのかは分かりませんが、ここ数百年の環境を考えるとそのように思われます。勇払原野以外にはないのは、他の植物に負けてしまったためなのかも知れません。野生の状態を保った栽培方法としては、自生地に近い環境で残すことが重要です。栽培化も果樹として重要なことですので、栽培化と資源を保存するのは別のことと割り切って認識して取り組むのが良いと考えます。

鈴木：今後の生態系の保存と人の関わりについて、原田さんと草苺さんからご意見をお願いします。

原田：草苺さんからハスカップ・サンクチュアリでハスカップが枯れていて、植生が変わっている中で何とかしなければいけないというお話を伺って、そこにいろいろな方がかかわることによって、周辺の自然に目を向けるきっかけになるのではないかと思います。

サンクチュアリではどのようにしてくと、ハスカップがまた勢を取り戻すことができ、どのように人がかかわることができますか？

草苺：原田さんがおっしゃったことが今日のテーマなのだと思います。これまで、ハスカップを川上から川下までの何人かで取り上げて話す機会がありませんでしたので、そのきっかけとなっていたらと思います。

保全していく方法は考えている最中で、気になっているのはハスカップの寿命が何年なのかということです。40年前にサンクチュアリに行ったときから大きさがほとんど変わっていない印象があります。枯れ始めている枝も太さは直径45ミリ程度で、年輪を削ってみても50年程度までしか読むことができないのです。

北大の演習林では270年前にあった大噴火の降灰で全滅しているという認識ですが、研究林の中には直径1mぐらいの原生林があって、200年ぐらいで復活したと考えられています。鳥がミズゴケの中に種を運んだであろう、高さ10センチ程度のハスカップ実生の苗がびっしりと生えているところが苫東にありますので、ハスカップも270年前に全滅したと考えると、ミズゴケのあるようなところで復活したのではないかと考えられます。しかし、40年前と太さは変わっていないように見えるのです。

ここで言いたのは、勇払原野でハスカップの一番太いものを見つけてそれをシンボルツリーのように勇払原野の Something Great として、子どもたちの環境教育で触れることと同じように大人も自然に影響のない形で、原野のご利益に預かるということをしてはどうか。これまで貴重なものは遠くに保存してきましたが、そこから少し踏み出しても良いのではないかと思います。

大西：草苺さんもおっしゃいましたが、ハスカップ、勇払原野、現苫、苫東、栽培をしている山口さんなど、いろいろな視点で話げたことに意義があるのだと思います。

鈴木：苫東地区全体でハスカップをもっと盛り立てていくということだと思います。勇払原野が世界のハスカップの発祥の地ですから、もっとPRして苫小牧地域の発展につなげていければと思います。

長時間にわたってみなさんご参加・ご意見いただきありがとうございました。これでフォーラムを閉会したいと思います。ありがとうございました。

司会：鈴木先生、パネリストの皆さんありがとうございました。